

新・平家物語

第十二卷

新・平家物語 第十二卷 （全十二卷）

定 価 三五〇円

昭和三八年四月一五日第一刷発行

著 者 吉川英治

発行者 伴 俊彦

印刷所 大日本印刷株式会社

発 行 所 東京 北九州
大阪 名古屋 朝日新聞社

© 吉川英治 一九六三年

第十二卷目次

静の巻(続)

三

吉野雛の巻

一六一

装幀 N D C 原 弘

静

の

巻
(続)

古女房

『あなた。……あなたってば。髷つんぱじゃないんでしよう、あなたは』

蓬よもぎも、いつか四十をこえると、どこの古女房とも違われない、型通りの古女房となっていた。

良人かつとの麻鳥あさどりのたまらない髷ひんしゆくは、常にその語感からも来るものらしい。いちいち気を突つつかれていては、自分が助からないのである。わざと麻痺まいひに努め、これも世間にさらな古亭主の横着顔を、きめ込んでいた。

『……ち、うるさい。読書の間ぐらひは、放はなっておいてくれないかなあ』

『うるさければ、返辞をなさいな』

『この通り、返辞はしているではないか。なんだ、用とは』

『ちよっと、来てみてくださいいよ』

『どこへ』

『いま、納屋なやへお漬物つけものを出しにはいったら、大きな穴が掘られているんですよ。納屋の地べたに』

『もぐらだろう。もぐらならどこでも掘るさ』

『あなたじゃないんですか。下手人げしゅたんは』

『知らん。わしは納屋へなぞはいったこともない』

『じゃあ、たいへんだ。あなたでなければ盗人と極まっている。去年こぞの冬、堀川の判官さまが、都をお立ち退きのさい、長い間、陣医として、よう勤めてくれたと、砂金さきん一包を賜たまったでしよう』

『それは、おまえの手に、そっくり預けておいたろ』

『ですからさ。お部屋へおいても、自体忘れっぽいあなただし、年暮くはなお物騒ものさわだしと、考えあぐねて、納屋の土に埋くけておいたんですよ。それが、壺つぼだけで、中身なかみは失なくなってるじゃありませんか』

『失なくなった物はしょうがない。だれかが嗅かぎつけたものだろう』

『冗談冗談じゃありませんよ、あれだけのおかね、一生かかったって、二度と見ることもできないほどな物でしょう。ま、来て見てくださいな、ああ、どうしよう』

『行つて見たつて始まるまい。盗まれた物が返るわけもないしさ』

『ほんとに、あなたが持ち出したのじゃないんですね。正直にいつてくださいいよ、正直に』

『ばかも休みやすみいいなさい。なんでわしがそんな真似をするか』

いわれてみればそれに違いない。良人は、おかねを拝領して来た時でも、かねの量目を量るでもなく、「これは、わたくしごとに費つてはならぬ。いつか時をみて、貧しい人達のために費うのだからしまつておけ」と、自分へ手渡したきり、どこへ置いたとも、ついぞたずねもしない人だった。

蓬にすれば、もとよりの貧乏世帯、そのうちの少少でも、暮らしにまわしたさはやまやまだつたが、良人の律儀が許すはずもなし、何よりはまた、まもなく義経の大物ノ浦遭難という世の騒ぎが起こり、ここの小屋へも、東国兵がやつて来て、

『なんじら夫婦は、判官どのより、格別お目をかけられていた者の由、もしや由縁を頼つて、堀川の身内の

者が、これへ頼つて来てはおらぬか』
と、朝に夕に、うるさい詮議立てだった。

その嫌疑では、麻鳥も、たびたび出頭を命ぜられたほどだが、大波羅將士の内には、かつて壇ノ浦で、麻鳥の医手にかかった者もあり、まずことなきは得たものの、蓬は、もし拝領の金を見つけられてはと、あわててその折、納屋の土中にふかく埋け込み、漬物桶やら雑具などを上にかぶせて、いつか、それを忘れるほど、日は過ぎていたのである。

いや実は、そんな顧慮もしていられない心配ごとが、またまた、内輪に起こつてもいたのだった。

というのは、ある夜、ここを頼つて来た主従三名の男女がある。それは——和泉の御陵守の長に匿まわれて、久しいこと療養のあげく、いなな娘に仕立てられて、吾野余次郎、渡辺番のふたりに守られて来た北方の河越殿（百合野）であつた。

夫婦は仰天した。

ここは危い。わざわざ、追捕の網の中へ、われからはいつて来たようなもの。

でも、夫婦は心を協わせて、誠意を見せてはいたが、余次郎や番の考えでも、しよせん長居は危険と知り、再び、御方を牛の背へ乗せて、ただ、

『——ひとまず、木曾路へ』

とのみ、いい残して、立ち去った。

木曾には、河越氏の縁家がある。百合野の兄河越小太郎も、堀川離散のさい、木曾へ行ったことかもしれない。という百合野の思案に、にわかな宿替えを、思い立ったものであらう。——何はともあれ、その人たちを送り出した後では、麻鳥夫婦も、ほっと、胸なで下ろしたことがあった。

『じゃあ、わたくしは知りませんよ。わかりましたね』

『何がさ。しつこいな』

『盗まれたおかねの話じゃありませんか。ちよっと起つて、納屋を、見てもくだらないで』

『あきらめるしかないもの』

『こんなことなら、いっそ、暮らしの方へ、少しでも費つておいたら、どんなに、わたくしも助かつていたか知れやしない』

『愚痴はよそう。金は金、だれかの手で、何かにつかわれているだろうよ。……さ、あっちへ行っておくれ、あっちへ、あっちへ』

麻鳥はまた、机の上にはおづえを乗せた。そして、むずかしい漢書へ眼をさらし始めると、もう何をいつても、見向きはしない。

『……ひとを、はえでも追うように』

意地になって、蓬は、良人の背ぼねを相手に、まだ、すわりこんでいる。

なんていう人だろう、この人という人は。

連れ添つても、連れ添つても、一生末生、わけの分からぬ良人ではある。——

一体こんな効い性なしの男の、どこがよくて、恋したり、二十何年も、貧乏を契つて来たのか。あの頃の男を見る眼の、自分の幼稚さまでが、うらめしくなる。

ふた言めには、学問学問と、まるで机の虫みたい。

それも、若いころはまだ「いまに、うちの人も、きっと偉い医博士になり、妻の自分も、腕木門のある家から輿に乗って出るくらいにはなれるだろう」と、内助の張り合いも持っていたが、とんでもない、年をとればとるほど、出世の道などは、まるでそっち退け。

立身の緒なら、ずいぶん、貴人のお迎えもあったのに、牛飼町の貧乏人ばかり診て歩いたり、戦さのちまたから、路傍の捨て子や、宿無し子を集めて来たりして、自分は飢えの余り、おかしな物を食べ、へどを吐いて、寝こんでしまったり……。

この人の頭には、貧乏人への同情は、いっぱいあっても、女房子などは、あるのか無いのか分からない。木曾討入りの時だって、そうだった。

都是乱脈、地獄のやみだといって——この洛外へ移ったのはよいが、それも身の安全のためではなく、親のない浮浪児を、何十人も拾って来て、「——子どもたちには罪はないのだ。こうして、せめて子どもらを、よく育てておけば、自然、つぎの世は、少しは、よくなってくれるだろう」なんて、途方もない遠い先の——

自分たち夫婦が、しよせん、生きてもない先の世までを考えて——何がおもしろいのか、このわたくしや、ほんとの子には、どれほど、よいいなみじめを舐めさせて来たことか。

あぐくにまた、そのたぐさんな餓鬼の子の養いを、わたくしひとりに負わせて、自分は「——堀川どのの御懇請、もだし難く」とかいって、陣医のお役をひきうけ、屋島、壇ノ浦の遠くまで行ってしまう、その間、便り一つ、妻へよこしたことはない。

そして、やつと去年の冬、帰って来たとおもえば、その日からまた、机の虫だ。

もっとも、良人にすれば、この洛外広沢の疎開小屋へ、久しぶり帰ってみた日、がっかりして、口もきけなかったのは、むりではない。

良人の留守のまに、ここにいる餓鬼の子たちは、小屋の巢をきらって、みんな蛇や蜂みたいに、もとのちまたへ、飛び去ってしまったのだから。

なぜかって、留守中、女のわたくしだけと見て、みな小ばかりし、手に負えたものではない。

どうしようもなかったのだ。

それは、まだしも。——ことし十五となる実子の麻丸まで、餓鬼の子の悪さに染まって、家を飛び出してしまったことだ。

その点だけは、なんともなんとも、申しわけない。

：「お詫びのしようありません」と、額をすりつけてあやまった。けれど良人は、その時だって、かくべつ妻を責めるでもなかった。子に裏切られたような、いかに、辛い顔はしていたが「……ふうん、麻丸も飛び出してしまったか。ひどいものだ、世のおとなが悪い時に、子どもだけがよくなりっこはない。わしたち夫婦にも、まだ、何か足りなかったんだろうなあ、まして、ひとの子が、散っちゃうのは、無理もないわ」と、ぼそつと、つぶやいたに過ぎなかった。

けれど、それから良人は、よけい鈍^{どん}になって、ただただ、憂さを忘れようとしている人に見える。

一つには、判官さまの末路も、ひどく、良人のばかり正直には、こたえたものにちがいない。「あのお方だけは、武門にせよ、お人がちがう」と、口癖のように、

賞め称えていた人が、今は天下の科人^{とがびと}とよばれ、凶悪な火放^つけ物盗り同様、物ずさまじい追捕^{ついぶ}に追われているのを見——「ああ、世の样も、人の道も、わけが分からなくなつて来た」と、ある日は、うわごとみたいにいい放つ姿を、机の前に見ることもあつた。

『ええ、じれったい人』

と、かの女は、壁のようにものいわぬ良人の背へ、ついに、しびれを切らして、

『いっそ、浮気でもする良人なら、さっぱり切れることもできように、憎めもせず、喧嘩^{けんか}相手にもなつてくれず、なんてまあ、つまらない、名ばかりの亭主だろう』

腹いせに、こうでもいったら、眼ばしら立てて、きつと、振り向いて来るかと思ひ、蓬は、わざと聞こえよがしにつぶやいた。

もし、良人が「なにっ」と、いつて来れば、それだけでも、夫婦の味がするかもしれぬ。と思つたのだが、反応もないので、
『ああ、つまらない』

と、こんどは本心からいって、腰を上げた。そして、『こんな、つまらない一生こそ、だれか、掘り返して、盗んで行ってくればいいのに』と、だれへともなく、当りちらしながら、未練そうに、また、以前の納屋のまえに立った。

女体の異兆

かの女の蹻音に、暗い納屋の内から、びよんと、犬の子みために、飛び出した子があつた。

麻丸の下、ことし十二、三になる女の子、円であつた。

『たいへんよ。お母あさん。たいへん』と、円は、口をとがらせて告げた。『——お兄さんの、きたない着物や袴が……。ほら、ほら、あんなところに捨ててある』

『え。麻丸の着物が』

蓬は、驚いて、中へ駆けこみ、べつな物置きだなを

見まわした。そこらも、引っくり返されてある。

かねて良人が、堀川どのからいただいたまま、ろくに着もせず、しまつておいた真新しい狩衣と袴。それから太刀なども、見当らない。

『きつと、お兄さんだ。その土を掘った泥棒も、お兄さんかもしれないや』

無邪気な声に似ていたが、円のことは、母親の胸をつき刺した。

もちど、蓬は、奥の机へ、甲高く呼びたてた。

——麻丸がと聞くと、こんどは、かの女の良人も、蹻ではなかった。すぐ飛び出して来、口をそろえて、妻や円が、麻丸の仕業と誹るのを聞きながら、かれもやや平静を欠いた面持ちだった。納屋の内や外を、泣きたいような眼で見返した末、

『……ひとりじゃないね』

ぽつんといったきり、あとは茫然と、腕ぐみしている麻鳥だった。

『え。大勢ですって』

『日陰の土をごらん。小さい蹻跡が、やたらに残って

いるじゃないか』

『じゃあ、麻丸が餓鬼の大將になって、以前、うちにいた悪い子たちを、引張つて来てやった仕事かもしれませんか』

『多分、そんなことだろう……。だが、よその家ではなくて、よかつたよ』

『おかねばかりか、太刀や狩衣まで持ち出して……。今に何をしでかすやら知れたものじゃありません。ああ飛んでもない子になってしまった。それもこれも、あなたが、自分の貧乏や子どもことは考えず、ひとのおせっかいばかりに暮れていたからですよ』

『今さら、そんな繰り言をいつてみたって、どうにもなるまい』

『親として、これがしゃあしゃあとしていられますかね。わたくしは……わたくしは、くやしい。あんな良い子を、大それた盗みをするような子にしてしまつて』

蓬は、そで口を噛んで、泣きじゃくつた。そばへ寄り添つてくる円を抱きよせて、また、

『ね、まじか。おまえだけは、そばにいておくれ。お父さんが、ああなたので、子どもにまで、あいそを尽かされてしまふんだよ。家さえ、困らなければ、麻丸だって、悪い方へ逸れるはずはない子ども。だけど、医師の技はありながら、お父さんって人は、貧乏が性に合つていて、好きこのんで、わたくしたちにまで、ぼろを下げさせているんだからしょうがない。何かの因縁だろうと、お母あさんも、あきらめてはいるけれど……』

円へいつているのだが、じつは良人への恨みつらみな愚痴でしかない。いつのる女の愚痴というものは、どこかに持つ、幼稚なあわれさを男に催させ、男をして、突然、滑稽な感に耐えなくさせるものでもあった。

『ははは。もういい、もうよせ』

『何が、おかしいんです、あなたは』

『何も分からない円までが、べそをかいているじゃないか』

『お暇をください、わたくしに』

『おや、その年になって、今さら、どうするんだい』

『そんなどころじゃありませんよ。あなたは、平気でいられるでしょうが、わたくしには、麻丸が悪徒の仲間へ落ちてゆくのを、見てはいられない。都じゅう歩いて、あの子を探し出さんです』

『それはむだだろう。広い都の中』

『いいえ、東寺の界限かいがい、羅生門、東山の八坂ノ塔やさかなど、浮浪たちの巢を、探し歩けば』

『ま、お待ちよ。無理はないが……』と、麻鳥は、妻も誘って、裏の濡れ縁に、腰かけた。しきりに、さつきから、親の反省を、かれ自身は抱いているふうだった。

『そういわれると、わしは辛い。わしも世のおとなのひとりだ。麻丸ばかりでなく、近ごろ、都の内には、長い戦さのちまたが生んだ悪童が、党を組んで、仕たい放題な悪さをやっているそう。とはいえ、保元、平治以来、おなどもが演じたことにくらべれば、まだ小さいいいさい、児戯の反抗……』

『そんなこと、どうだっていいじゃありませんか。わ

たくしはわたくしの子どもだけを、悪徒の仲間から連れ戻して来ればいいんです』

『そうはゆかないよ、おたがいの世間だからね。それでは、世間の持ち合いというものは、おしまになる。こんな小屋でも、世間の中の一軒だから』

『じゃあ、捨てた氣でいるんですか、麻丸を』

『とんでもない。あれを生んだわしたちは、どこまでも、生んだ責任を持たねばなるまいさ』

『だから、わたくしが』

『まあ、お聞き。わしたちおとなに、愚痴をいわしてもらえらるなら、まったく、えらい時代に、あいにくおとなになったもんだ。生んだ子に責任があるばかりでなく、生んだ時代にも、おとなたちすべては皆、同様な責任があらうというものじゃないか』

『なにいつてるんです、あなたは。——そんな考え方は、まあ、院の法皇さまが、第一になすつたらいいでしょう。木曾の朝日將軍とか、平家の太政入道だいていどうどのの御一門とか、いい思いをなすつたお人は皆するがいい。叡山けいさんの偉い大衆だの、奈良の喧嘩けんか強い法師がたも、そ

の組かも知れません。……だけど、あなたなどは、六位の下にも、武家のはしぐれにもなったわけじゃないでしょ。——義経さまに請われて、壇ノ浦くんだりまで行ったのも、源氏平家を問わず、ただ、怪我人助けのためだったのじゃありませんか。あぐくの果て、つづいているのは、この貧乏と、迷惑ばかり……。どうして、今の世間に、責任とやらを、負わなければ、いけないんです、わかりませんか、わたくしには』

『まあ、そうけんもほろろに、お怒りでない。おまえの方が、一応だれものいう道理だがね。けれど、性分なんだ、わしの思いは。——あいにく、保元、平治、治承、養和、寿永という稀有な年代におとなとなって、この地上にともども生きて来てしまったもんだから、自分だけは悪因も作っていない、罪もないと、ひとり超然とい子になつていられない気もなんだよ。といつて、わしになんの償いも世にできないこともよく分かっているのだがね。……祈りさ、ああただ、いのりさ。わしの思いは』

『變つてますよ、あなたという人は。女房の幸は、

ちつとも祈りはしないで』

『そんなことはない。わしとて親だ、おまえの良人だ。だがね正直、この間じゅうから、わしは、人間というもの、ほんとほといやになりかけて、困っている。すこし氣鬱症にかかった氣味だ。癒さなければいけないと思つてゐる』

『どうしてですか』

『壇ノ浦以後、世のなり行きが、こうとは、わしも思わなかった。世の物を、焼きにやき、人の屍を積みにつみ、あれほどな修羅も、これでまあ、ほんとの泰平にかえるなら、ぜひもない犠牲かと、眼をつぶつて念じていたら、なんのことはない、半年も保ちはしなかった……』

『だって、わたくしたちのせいではない』

『せいではなくても、禍はかかつて来る。無力な民の災難は、名のある者の没落や討ち死によりも、どれほど多いか。——嘆いてもなげき足りぬことだが、鎌倉どのが今のようでは、再び何が起こるやら、それおそろしい。人間がみな獣じみて見え、この世の中までい

やになる』

『まだ、戦いは、続くんですか』

『一に判官どのお胸だが、いかに忍従なお方でも、余りに辱じしめられ、追いつめられれば、人間、生きるために、どう猛獣に一変しないものではない。——いや、こんな始末では、鎌倉の府自体も、長くは保つまい。せつかな勝者の府も、民の望みにこたえず、かえって、驕る者とおごる者の争いが、みずからの鎌倉を、猜疑と讒と陰謀の府にしてしまわなければ幸せだ』

古女房のありがたさである。人にはもらせぬこんな鬱気も、蓬なればこそ、おもしろくない顔はしていながらも、聞いてはくれる。——と麻鳥が気がついて、苦笑の下に、口をつぐんだ時だった。

表の柴折戸の口で、しきりに、

『医師の阿部麻鳥どのと仰っしゃるのは、こちら様でございましょうかの。——東嵯峨に住まうお知る辺の御病人から、頼まれて来た近所の男でござりまするが』と、おとずれる客の声がしていた。

客は、素朴な農家の小旦那。

麻鳥の前に、もじもじすわって、

『ついこのお近くまで、用事で参ると申しましたら、禪尼どのが、ぜひ立ち寄って、お願い申してくれとのお言づてでござりましてな』

と、一言毎に、頭を下げていうのであった。

『それは、御苦労な。どなたか、わしに診てくれいと仰っしゃるので』

『はい、はい。たぶんなかなか来てはくださるまいがと、禪尼どのも、とつこうつ、お考えでございましたが』

『御病人とは、そのお人か』

『いえ、禪尼のおむすめ御の方なので』

『むすめ御』

『……へい』と、急にまた、男は肩をせばめ、外や内を、見まわしながら声をひくめた。

『そ、その、御病人とは、静御前でござりまする。何